

## マタイによる福音書1章21節 「イエスの御名」

### 1A 神に付けられる名

#### 1B 外国の神々

#### 2B ヤハウエ

### 2A 「主は救い」

#### 1B 苦しみからの救い

#### 2B 罪と死からの救い

##### 1C バビロン捕囚

##### 2C 女の子孫

##### 3C 主が来られた目的

#### 3B 御名にある力

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、今日から新約聖書、マタイによる福音書に入ります。内容がとても濃いですね、おそらく1章あるいは2章ずつ、これから進むことでしょう。午後は、マタイ1章のみを読んでいきたいと思います。今朝は、1章21節に注目したいと思います。「**マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。**」私たちは、旧約聖書をずっと学んでいった経験と知識があります、ですから、この言葉が単なるクリスマスのお話しということだけで終わることはありません。マリヤという言葉は、モーセの姉、ミリヤムのギリシヤ語名です。そしてイエスは、イエシュアという名前です。ヘブライ語、ユダヤ人の背景があることを思い出す必要があります。そして、イエシュアというのは、「主は救い」という意味を表すヘブル語、「ヨシュア」のギリシヤ語です。そう、モーセの後継者ヨシュアは、ギリシヤ語にするとです。ですからここは、「その名をイエシュアと名づけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪からイエシュアしてくださる方です」と言っています。

「救い」という言葉、これは私たちがだれもが渴望しているものです。私たち日本人には、どのような時に、救いという言葉を使っているか分かりませんが、今の状況が絶望的で、抑圧されていて、理想とは程遠い姿であり、そこから這いつくばって出て行こうにも、そんな見通しは全く無いという状況であります。人は、まずもってそんな希望は持てないから、現状維持ということで、今の状態を我慢しています。けれども、魂は枯渇しており、救われたいという思いを持っています。

ところで、今朝はちょっとお見せしたい動画があります。<sup>1</sup>私たちは、フォークダンス「マイムマイム」を覚えているでしょうか？「マイム、マイム」と言いながら踊りますね。これは、イスラエルのダンス

<sup>1</sup> [https://youtu.be/afIgoH3s\\_PA](https://youtu.be/afIgoH3s_PA)

の歌です。マイムはヘブル語で「水」のことです。そして歌詞が、イザヤ書 12 章 3 節から取ってきています。「あなたがたは喜びながら、救いの泉から水を汲む。」ここの「救い」という言葉が、イエシュアなのです。(40 秒あたりからスタート) 動画で「ミマア-ネイ ハ イエシュア」と言っています。「泉から、救いの」と言っています。そうです、イエス様の名前を私たちは学校で歌っていたのです。イエス様はヨハネ 7 章で、「37-38 節 だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」と言われました。聖書が救いの泉、ミマネイ ハ・イエシュアと言っているところでイエス様の名前とほとんど同じ発音の「救い」が出て来ていたのです。

なぜ日本でこんなに歌われて、踊られてきたのか？これは日本が戦争に負けて、GHQ が占領政策を実施した時に、フォークダンスを趣味とする人がいたそうなのです。1949 年以降、小学校でこの歌が教えられるようになりました。確かに、戦争が終わってまだ焼野が原が残っているような時に、救いが必要だったでしょう。荒野のようなところに、救いの泉が必要だったでしょう。けれども、そこに不思議に神は、私たちの主、イエス様の名前を歌わせていたのです。私たちの社会にも、日常生活にも未だ、救いを必要としています。

## 1A 神に付けられる名

### 1B 外国の神々

「名前」というのは、聖書時代には、何か特別な栄誉、名誉、あるいは特質、本質を表すものとして大事にされていました。そして、神々と呼ばれるものは、その神に自分たちの願っていること、その本質、欲しているものの象徴を投影させていました。

カナンの地にイスラエルが入っていきましたが、カナン人の主神は、バアルです。バアルは「主」という意味で、農耕において、他のあらゆる面において全てを支配しているという意味が込められています。それでいつも、何か力を持ちたい、影響力をもって人々を仕切りたいといつも思っている人は、バアルを拝みました。そして富については「マモン」という神がいました。お金さえあれば私は幸せに暮らせるということで、お金を神さまの名前に付けていたのです。そして、日本、いや世界中に、性風俗というのは発達していて、当時はアシュタロテというのが豊穡の女神でした。体に多数の乳房が付いているように、当時のポルノでした。そして、単に楽しみがほしい、何か興奮するようなことがあれば、刺激的なものがあればそれを追求したいと思ったら、モレクという神がいました。当時の人々は、それぞれ自分が何を欲しているかそれを神にして表現していたのです。

そして、それぞれの欲求自体は、決して悪ではありません。それ自体には、何も悪いものはありません。主は人に、地を支配するように命じられましたから、治めるということ、管理すること、リーダーシップを発揮すること自体に問題は何もありません。むしろ神が、治める賜物を与えてくださいます。富もそうですね、神が下さるものです。また、性欲もそうです、主は「生めよ、増えよ」

と言われました。楽しみも、主を喜び楽しむということ、また家族で楽しむこと、歌い踊ること、これらは全く悪いものではありません。しかし、それらの賜物を、賜物を下さる神以上に大切にすると間に違っており、それを情欲と呼びますが、情欲、貪りが偶像となるのです。

## 2B ヤハウエ

しかし、天地を造られた主は、そうした神々の名前の競争みたいになっているような状況がありました。エジプトにいたイスラエル人は、エジプトであらゆる神々に触れてきました。それで、モーセが質問し、主がご自分の名前を明かされました。「出エジプト 3:13-14 モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところへ遣わされた。』と。」主は、ご自分を人の願っている箱の中にご自身を入れなかったのです、「わたしは、ある」というものであると言われました。そして、主、YHVH という四つの子音ですが、おそらくは「ヤハウエ」というような発音であったであろうと言われています。そこにある意味は、「わたしが、あなたがたの必要になる」というものです。「わたしがいれば、あなた方の必要は満たされる」ということです。

ですから、主はアブラハムに対して、「ヤハウエ・イルエ」として現れました。それは、「主は備えておられる」ということです。いけにえの羊を主ご自身が備えてくださるということです。私たちに足りないものがありますか、必要なのは主ご自身です。主が備えになってくださいますから。他にも、主がイスラエルの民に癒しを与えられることを約束し、「ヤハウエ・ラファ」「主は癒す」となってくださいました。イスラエルがアマレクと戦わないといけなときは、「ヤハウエ・ニシ」「主は旗」となってくださいました。自分が戦っていると思っていますか？いいえ、主が戦ってくださるのです。他に、ギデオンが恐れていた時は、「ヤハウエ・シャローム」となられます。平安を求めて、いろんなことをしてしまいましたが、「わたしが平安だ」と言われるのです。みなが不義に陥っていて、正しさがなくなっているとき、ヤハウエ・ツエドケヌ(主は正義)、主の臨在が分からなくなってしまった時、ヤハウエ・シエマ(主がおられる)となられました。

このように主の御名は、とんでもなく貴いものとなったのです。それで、イスラエルの民は、主の御名を高らかにほめたたえ、御名をあがめました。私たちも、御名をほめたたえるのです。

## 2A 「主は救い」

そして今、御使いがヨセフに対して、「マリヤが男の子を産んだら、その子をイエシュア、主は救いと名づけなさい」と言ったのです。彼らは、救いを待望していました。それで「わたしが救いなのだ、イエシュアなのだ」と言われたのです。

## 1B 苦しみからの救い

当時のイスラエルは、非常に圧迫されていました。ローマの支配にありました。マラキ書の時は、ペルシヤの支配下にありました。そしてギリシヤがあり、ユダヤ人は酷い迫害を受けました。そしてローマが台頭しました。ローマの権力闘争の中で、ヘロデという人物が力を得て、ユダヤ人の王と称してエルサレムに入ってきます。ゆえにローマ帝国があり、そしてヘロデという男の統治下に入り、そして実は、宗教的にも硬直していました。サドカイ派というのが、神殿の管理をローマによって許されていた集団で、いわゆるエリート、金持ちの祭司長のグループです。そしてエッセネ派もいましたが、彼らは世から離れて、死海のほとりに共同体を作りました。そして最も、一般民衆に権威をもって教えていたのが、パリサイ派です。ところが、彼らは敬虔さを求めていく中で、外側の清さばかりを気にして、中身をないがしろにしていきました。要は、ユダヤ人は政治的にも、経済的、宗教的にも、圧迫されていた状況に生きていたのです。イザヤは、その時を「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。(9:2)」と言いました。闇の中にいたということです。

その苦しみからの救いを彼らは当然願っていたのでしょう。ローマからの圧迫からの救いを願っていました。政治的にそうなってくれたらと願っていました。それで独立運動の機運が高まり、紀元後 66 年にはユダヤ反乱が起こります。

## 2B 罪と死からの救い

けれども、御使いはヨセフに対して、そのような圧迫からの救いの話をしているのではなく、「**ご自分の民をその罪から救ってくださる方**」と言ったのです。単なる苦しみからの救いではなく、もっと人間として、その根幹からの救い、苦しみがこの世界に入って来たその根っこになっているところからの救いを話しています。これを「贖い」とも言うでしょう。

## 1C バビロン捕囚

イスラエルの救いは、出エジプトから始まりました。エジプトにおける苦しみの歴史、その奴隷状態から解放する神の救いであります。しかし、それがバビロン捕囚によって逆戻りになったのです。約束の地から引き抜かれ、異邦人の支配の中に入り、そこで奴隷生活を強いられました。しかし、よく考えてみれば、それは神がやみくもに、そのような状態に置かれたのではなく、イスラエルの民が神から背を向けて、偶像礼拝を行ない、心を頑なにしていたからです。その苦しみからの解放には、根本には罪からの解放、救いが必要だったのです。それで詩篇 133 篇の交読で読んだ内容があるのです。私は不義があるので、深い淵にいるようになっている。しかし、「主は、すべての不義からイスラエルを贖い出される。(8 節)」と希望を持っています。

いかがでしょうか、私たちもまた、自分の置かれている状況について、その苦しみについてそこから出させてくれ！と要求するかのように訴えているかもしれません。しかし、私たちに神の願われているのは、もっともっと深い部分、神との関わり、関係についてでしょう。イエス様が十字架に

付けられている時に、一方の犯罪人は、「おまえはキリストではないか。自分と俺たちを救え。」と言ったのに対して、もう一方の犯罪人は、「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。」と言って、「イエスさま。あなたの御国の位におつきになるとときには、私を思い出してください。」と願いました(ルカ 23:39-42)。

### 2C 女の子孫

そこで、イスラエルの出エジプトの歴史の始まる前、なぜそのような苦しみがあるのか、そもそもの始まりは、初めの人々が神に対して罪を犯したからです。神に言われていることに背いていたからです。それで、罪が世界に入りました。しかし、主はすぐに、女の子孫が、その誘惑をした蛇の子孫の頭を砕くと約束されました(創世 3:15)。そうです、女の子孫が罪からの救いをもたらします。それで、救いは必ず、生まれて来る男の子に期待がかけられていたのです。アブラハムにも、子孫が与えられ、その子孫によって世界の国々が祝福を受けることが約束されました。そしてダビデの世継ぎの子が、永遠の神の国を受け継ぐと約束されました。そして今、ダビデの子としてイエスさまが生まれようとしています。この方が、罪からイスラエルを救ってくださる方、そして異邦人である私たちを罪から救ってくださる方として来られたのです。

### 3C 主が来られた目的

私たちは、いろいろなボタンのかけ間違いを見ます。これは、どう考えてもおかしい、間違っている。自分の生活や人生のあり方、また社会の在り方、家族の在り方は間違っている。本来あるべきところから違って、歪んでいる、ずれていると感じるのですが、そのボタンのかけ間違いの元を辿らないといけなのです。私たちはいつも、その結果を直そうとします。がんの手術なのに、痛み止めの薬を飲んでいるような状態です。けれども、ボタンのかけ間違いは、一番上の、初めに間違ったところに戻らないといけません。それが、アダムが罪を犯したという、人類の初めの歴史なのです。そこが直されている必要があるのですが、それを直しに来たのが最後のアダムとも呼ばれる、イエス・キリストなのです。

イエス様は言われました。「人の子は、失われた人を探して救うために来たのです。(ルカ 19:10)」これは、取税人ザアカイが、自分の家にイエス様をお迎えして、彼が回心して、貧しい人に施しをし、だまし取ったものの四倍にして返すということをした後に話しました。彼は、物理的には金持ちで、不自由のなかったはずの人なのですが、失われていたのです。一見、幸せでいても罪の縄目にいたからです。またイエス様は、「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ 3:17)」と言われました。これは、ニコデモという高名な、ユダヤ人教師に対して語られた言葉です。そのような道徳的な人でさえ、神について教えるような学者でさえ、裁かれるべき存在であり、けれども御子が救いに来られたと言っています。学問や道徳をもってしても、人は罪から救われないのです。罪から救うのは、イエシュア、主は救うという名にしかありません。

### 3B 御名にある力

そして、イエスの御名にしかないだけでなく、この方の名にこそ人を救う力があります。使徒パウロが言いました。「ピリピ 2:9-11 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」あらゆる名にまさる名を神が与えられました。すべての者が、イエスが主であると膝をかがめて、告白させるような名であります。あらゆる主権や力にはるかにまさって、この方の名に力が与えられたのです。イエス様ご自身が、ご自分の名に力があることを教えられました。「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。(ヨハネ 14:13)」私たちは、祈りを特権と考えているでしょうか？これほどまでに、すばらしい御名が与えられているのです。

そして、このことを使徒たちの働きを見ると、具体的にその力が表れている場面を読むことができます。生まれつき足なえの男にペテロは、「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。(使徒 3:6)」と言いました。すると、たちまち、彼が立ち上がり、歩き出しました。そして、その立っている男のことについて、サンヘドリンで、「使徒 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」と言いました。そして罪からの救いについて、ピリピにおいて、看守に対してパウロは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒 16:31)」と言いました。それで、彼はすぐにパウロとシラスを引き取り、打ち傷を洗って、家族と共に水のバプテスマを受けました。イエス様の名によって、彼とその家族の心が変わられたのです。

私たちに与えられた、イエシュアの名です。主は、私たちを救われます。その根本から、つまり罪から救われます。そして、全体を、私たちの魂だけでなく体も、教会全体も、この世界全体も、いつかイエス様の御名によって贖ってくださいます。パウロが言いました、「ローマ 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」イエスの御名を呼び求めれば、救われるのです。これは単なる発声練習ではありません。この方に本当に救いがあるのだということを信じて、そして呼び求めるのです。主は生きておられます。パウロはこうも言いました。「10:13「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。」